

スポーツ健康科学部における水泳の授業展開について

水野 かゝみ¹⁾・後藤 健太¹⁾

Study on the class of the swimming in Faculty of Sports and Health

Kagami MIZUNO and Kenta GOTO

2017年4月に中部学院大学にスポーツ健康科学部が新設され、中学・高等学校の保健体育教員免許の取得が可能なカリキュラム内容になっており、スポーツ実技種目が複数置かれた。そのうちの多くの種目は学内の施設において実施することが可能であるが、水泳については本学にプールの設備がないため、学外の施設を借用しての授業展開となった。受講対象者は2年生83名で、授業前の水泳能力及び水泳経験は多種多様であったが、半期の授業を通して泳力は向上し自信もつき、学生の授業評価も高い結果であった。特に事故もなく安全に終えることができ、指導体制について問題はなかったとしたいところであるが、本学のカリキュラム上、全学生が必修科目であるにもかかわらず、身体的な理由でプールに入水できない学生への対応や、途中クラブ活動中の怪我や、交通事故、あるいは課外活動を優先したために出席不足で単位未修得の者が複数でてしまったことなど、今年度以降授業を進めていくうえでいくつかの課題が明確になった。

キーワード：水泳、泳力、指導体制、保健体育教員養成、水泳指導力

目 的

2017年4月に中部学院大学スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科が新設された。中学・高等学校の保健体育教員養成課程を含めたカリキュラム内容が文部科学省に認可された。実技科目については本学の施設で展開が可能な種目が置かれたが、筆者はプール設備のない本学において『水泳』の授業を担当することになった。本学では、現在すでに廃止されているが2009年4月～2014年3月までの5年間、人間福祉学部健康福祉学科の中にスポーツ専攻が置かれ、筆者は水泳の授業を担当した実績を持つ。その展開内容についてはすでに本学紀要において報告した(水野 2015)。今回新たにスポーツ系の学部として設置され、授業展開における体制や対象学生は異なるが、中学・高等学校保健体育教員を養成するという責務を担っていること自体は変わらないため、今回の半期の授業の取り組みについてまとめ、

今後の課題及び、指導方法・指導体制について検討する材料としたい。本科目の授業計画(シラバス)を表1に示した。半期科目であること、小・中・高における学びを踏まえたうえで、保健体育教員として備えておくべき技術や技能を習得できるよう考慮し、計画した(文部科学省 2008, 2009)。本学にはプールの設備がないため近隣の市民プールを借用し、受講生83名を2クラスに分け、木曜日Aクラス、金曜日Bクラスとし、片道約20分かけてバスで移動し、プールで授業を実施した。大学から市民プールまでの移動は毎回教員2名が受講生を引率し、移動中の安全確保のため、バスの乗り遅れや現地に個人で移動することは一切認めなかった。また毎回、往きのバスの中では問診票を用いて授業前の体調のチェックをおこない、参加の有無について各自が判断した上で提出をさせた。さらに授業終了後も帰りのバスの中で体調のチェックをし、その回の授業評価および感想・反省を記載した上で提出させるなど、バスでの移動時間を有

1) スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科

表1 水泳実技 シラバス2018年度版

2018年度	スポーツ実技D (水泳)	担当者	水野・後藤																																																			
<p><科目>スポーツ健康科学部 専門教育系・専門共通科目 半期(前期:16回) 1単位 <関連資格・免許> 中学・高校保健体育教員免許</p>																																																						
<p><到達目標> 水と水泳の特性を理解し、自己保全の仕方と各種泳法を身につける。指導者の立場としての心構えや水泳中に起こりうる怪我や事故に対する対処法について理解する。</p>																																																						
<p><講義概要> 4泳法(クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ)、横泳ぎ(水府流太田派)、立ち泳ぎ(踏み足、巻き足)について学習する。さらにそれぞれの泳ぎ方の指導法及び水泳中に起こりやすい事故に対する対処法について理解する。</p>																																																						
<p><授業計画></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>日 程</th> <th>場 所</th> <th>内 容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 回目</td> <td>教室</td> <td>ガイダンス</td> </tr> <tr> <td>2 回目</td> <td>プール</td> <td>水馴れ、泳力判定、班分け</td> </tr> <tr> <td>3 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>4 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>5 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>6 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>7 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>8 回目</td> <td>教室</td> <td>理論</td> </tr> <tr> <td>9 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>10 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>11 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>12 回目</td> <td>プール</td> <td>各種泳法</td> </tr> <tr> <td>13 回目</td> <td>プール</td> <td>水泳における救急法、救助法</td> </tr> <tr> <td>14 回目</td> <td>プール</td> <td>総合練習</td> </tr> <tr> <td>15 回目</td> <td>プール</td> <td>実技テスト</td> </tr> <tr> <td>16 回目</td> <td>教室</td> <td>まとめと理論テスト</td> </tr> </tbody> </table>				日 程	場 所	内 容	1 回目	教室	ガイダンス	2 回目	プール	水馴れ、泳力判定、班分け	3 回目	プール	各種泳法	4 回目	プール	各種泳法	5 回目	プール	各種泳法	6 回目	プール	各種泳法	7 回目	プール	各種泳法	8 回目	教室	理論	9 回目	プール	各種泳法	10 回目	プール	各種泳法	11 回目	プール	各種泳法	12 回目	プール	各種泳法	13 回目	プール	水泳における救急法、救助法	14 回目	プール	総合練習	15 回目	プール	実技テスト	16 回目	教室	まとめと理論テスト
日 程	場 所	内 容																																																				
1 回目	教室	ガイダンス																																																				
2 回目	プール	水馴れ、泳力判定、班分け																																																				
3 回目	プール	各種泳法																																																				
4 回目	プール	各種泳法																																																				
5 回目	プール	各種泳法																																																				
6 回目	プール	各種泳法																																																				
7 回目	プール	各種泳法																																																				
8 回目	教室	理論																																																				
9 回目	プール	各種泳法																																																				
10 回目	プール	各種泳法																																																				
11 回目	プール	各種泳法																																																				
12 回目	プール	各種泳法																																																				
13 回目	プール	水泳における救急法、救助法																																																				
14 回目	プール	総合練習																																																				
15 回目	プール	実技テスト																																																				
16 回目	教室	まとめと理論テスト																																																				
<p><参考文献>水泳指導教本 (大修館書店)、赤十字水上安全法講習教本(日本赤十字社) <評価方法> 出席状況、受講態度、技術評価、理論評価により総合的に評価する</p>																																																						
<p><受講上の注意> 実技はわかかさ市民プール(関市)で行うため、履修者全員で毎週大学よりバスで移動する。13:00発のため、必ず昼食をすませ、必要なもの(水着・帽子、ゴーグル、タオル、筆記具、ロッカー用の100円玉、その他)だけを持参してバス乗り場に集合すること。この時点で間に合わなかった者は欠席となるので注意すること。また、往復の移動のバスの中で健康チェック及び学習成果のチェックを行うため筆記用具は必ず持参する。なお、遅刻・見学は認めない。</p>																																																						

効に活用した。本稿は、この半期の水泳の授業展開についてまとめ、課題点を見出し、今後の水泳授業展開に役立てることを目的とした。

方 法

1. 調査対象者

2018年度2年生水泳実技受講者71名(受講対象者のうち単位が取得できた者)

表2 受講者の特徴について

質問項目	%		
	はい	どちらともいえない	いいえ
1. あなたは身体を動かすことが好きですか。	94.4	2.8	2.8
2. あなたは夢中になれるスポーツがありますか。	90.1	5.6	4.3
3. あなたは小・中・高の体育の授業は好きでしたか。	93.0	4.2	2.8
4. 体育の成績評価は全般に良かったですか。	81.7	12.7	5.6
5. あなたは運動能力に自信はありますか。	59.1	31.0	9.9
6. あなたは体力に自信はありますか。	40.8	35.2	24.0
7. あなたは健康だと思っていますか。	80.3	12.7	7.0
8. あなたはスポーツを見るのが好きですか。	90.2	4.2	5.6
9. 赤ちゃんを見てかわいいと思いますか。	88.7	9.9	1.4
10. あなたは幼児と遊ぶことができますか。	81.7	14.1	4.2
11. あなたは子どもが好きですか。	80.3	18.3	1.4
12. あなたは小学生と遊ぶことができますか。	76.1	19.7	4.2
13. あなたはお年寄りとの会話ができますか。	76.1	21.1	2.8
14. あなたは初対面の人と平気で会話ができますか。	47.9	29.6	22.5
15. あなたは明るい性格だと思いますか。	62.0	29.6	8.4
16. あなたは忍耐力がありますか。	52.1	43.7	4.2
17. あなたは努力家ですか。	36.6	46.5	16.9
18. あなたは運動やスポーツを教えたことがありますか。	70.4	18.3	11.3
19. あなたは機会があれば教えたいと思いますか。	63.4	35.2	1.4
20. あなたは運動やスポーツの指導者になりたいと思いますか。	47.9	39.4	12.7
21. あなたは学校の体育の先生になりたいですか。	28.2	39.4	32.4
22. あなたはもっとうまくなりたいと思っている運動技術がありますか。	80.3	15.5	4.2
23. あなたは運動・スポーツに関する本は読む方ですか。	26.8	33.8	39.4
24. あなたは運動・スポーツに関するビデオやDVDは見る方ですか。	40.8	32.4	26.8

表3 学習評価項目

1. 精一杯全力を尽くして運動することができましたか
2. 今日学習したことは、自分たちにはありましたか。
3. もっと長くやりたかったですか。
4. 深く心に残ること感動することはありましたか。
5. 運動の仕方を考えて練習しましたか。
6. いままでできなかったことが、できるようになりましたか。
7. 「あっそうか」「あっわかった」とおもったことがありましたか。
8. 学習の約束をきちんと守ることができましたか。
9. 運動のルールを守って学習できましたか。
10. 自分から進んで学習することができましたか。
11. 自分のめあてを持って学習できましたか。
12. 仲間に教えてあげたり、教えられたことはありましたか。
13. 仲間と協力して仲良くできましたか
14. 思わず拍手をしたり、「ワーッ」と歓声をあげたことがありましたか。

結果

1. 受講生の特徴について

受講生の特徴に関する調査では、1) 運動能力や健康度、2) スポーツに関する興味や関心度、3) 性格特徴、4) 他者との関わり、5) 指導経験・指導意欲の5点(24項目)について調べた。表2には、調査①の各調査項目別に調査協力者71名を3段階別に分類し、百分率で示した。

2. 調査期間

2018年4月～8月、前期の水泳の授業の時間内

3. 調査の種類

調査は以下の3種類とした。①表2に示すような受講生の性格特徴、運動・スポーツに対する態度などに関する調査、②水泳経験、泳力、指導力などに関する調査、③学生の授業評価では表3で示すような授業時間内の受講者の行動や態度などに関する調査(全日本スキー連盟 1996)

4. 調査の実施

①②は「水泳」の授業時間の初回ガイダンス時と最終回授業終了後に実施した。③はプールでの授業終了後毎回実施した。以上の3種類の調査はいずれも用意された質問に対して「はい」、「どちらともいえない」、「いいえ」の3段階で自己評価させた。

5. 調査結果の処理

③の調査では、「はい」は3点、「どちらともいえない」は2点、「いいえ」は1点として整理した。他の調査では、3段階別に該当者を分類し、その結果を割合で示した。

1) 運動能力および健康度 (8項目)

表2によれば、身体を動かすことが好きな者は94.4%、夢中になれるスポーツがある者が90.1%、スポーツを見ることが好きな者が90.2%であった。小学校、中学校、高校時に受けた体育の授業が好きであった者は93.0%、体育の成績評価も良かったと回答した者が81.7%と高い割合であった。しかし、運動能力に自信があるかという質問に対して、「ある」と回答した者は59.1%に対して、「どちらともいえない・ない」が40.9%、また体力に自信があるかという質問に対して、「ある」と回答した者が40.8%で「どちらともいえない・ない」が59.2%であった。さらに健康だと思っているかどうかの質問に対して、「健康である」と回答した者が80.3%、「どちらともいえない」が12.7%、「健康でない」が7.02%であった。

2) スポーツに関する興味や関心度 (3項目)

自分自身のスポーツの取り組む姿勢に関して、「さらにうまくなりたいと思っている運動技術がありますか?」という質問に対して、「ある」と回答した者が80.3%、「どちらともいえない・ない」が19.7%であった。「運動やスポーツに関する本は読むほうですか?」という質問では、「読む」と回答したものが26.8%、「どちらともいえない」が33.8%、「読まない」が39.4%、さらに「運動やスポーツに関するビデオやDVDは活用しますか?」という質問では、「活用する」と回答した者が40.8%、「どちらともいえない」が32.4%、「活用しない」が26.8%であった。

3) 性格特徴 (3項目)

「明るい性格だと思いますか?」という質問に対して、「思う」と回答した者が62.0%、「どちらともいえない」が29.6%、「思わない」が8.4%、また「忍耐力がありますか?」という質問に対して、「ある」と回答した者が52.1%、「どちらともいえない」が43.7%、「ない」が4.2%、「努力家だと思いますか?」という質問に対して、「思う」と回答した者が36.6%、「どちらともいえない」が46.5%、「思わない」が16.9%であった。

4) 他者との関わり (6項目)

対人関係についての質問では、赤ちゃんをみてかわいと思う者が88.7%、子どもが好きなのが80.3%と高い割合を示した。幼児と遊ぶことができ

るかという質問に対して、「遊べる」と回答した者は81.7%、「どちらともいえない」および「いいえ」と回答した者が18.3%であった。また、小学生と遊ぶことができるかどうかの質問については「できる」と回答した者が76.1%、「どちらともいえない・できない」と回答した者が23.9%であった。「お年寄りと会話ができますか?」という質問に対しては、「できる」と回答した者が76.1%、「どちらともいえない」および「できない」と回答した者が23.9%であった。さらに「初対面の人とも会話することは平気な方ですか?」という質問に対しては、「はい」と回答した者が47.9%、「どちらともいえない」が29.6%、「いいえ」が22.5%であった。

5) 指導経験・指導意欲 (4項目)

運動やスポーツの指導経験に関する質問では、「ある」と回答した者が70.4%、「どちらともいえない」および「いいえ」と回答した者が29.6%であった。また「機会があれば教えたいと思いますか?」という質問に対して、「教えたいと思う」63.4%、「どちらともいえない」および「教えたいと思わない」が36.6%であった。さらに「運動やスポーツの指導者になりたいですか?」という質問に対しては、「なりたいたいと思う」と回答した者が47.9%、「どちらともいえない」および「なりたいたいと思わない」が52.1%で、「学校の体育の先生になりたいと思いますか?」という質問に対して、「なりたいたいと思う」が28.2%、「どちらともいえない」および「なりたいたいと思わない」が71.8%であった。

2. 水泳の授業展開について

1) 授業内容と指導体制

本年度(2018)の授業内容(シラバス)を表1に示した。15回のうち、13回はプールでの実施、初回のガイダンス及び借用している施設側の都合(水抜き作業日)によりプールを使用できない回(計2回)は大学内の教室での実施となった。教室では講義形式で(水泳理論)おこなった。水泳の技術(主に4泳法)習得のための練習は施設側の都合もあり、25M屋内プール3コースを借用して行った。残り半分のコースは一般市民の方が使用している状況であった。立ち泳ぎと救助法の練習の回の際には水上安全救助員の有資格者の方に加わっていただいた。普段の指導体制は、筆者を含む大学専任教員2名と現場の有資格者の指導スタッフ2名で行った。1回の指

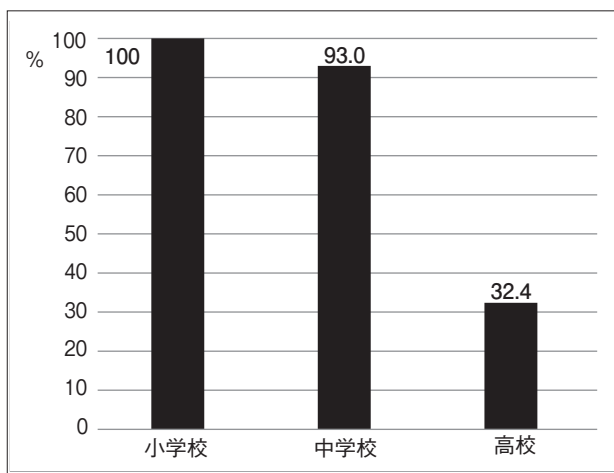


図1 受講者の水泳の授業経験について (%)

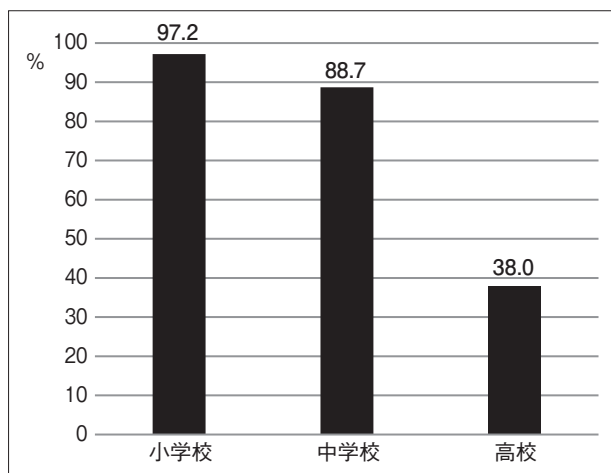


図2 学校プールの設置有り (%)

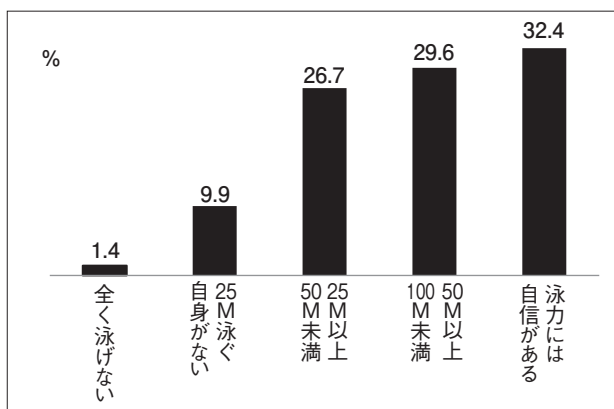


図3 ガイダンス時の泳力 (自己申告)

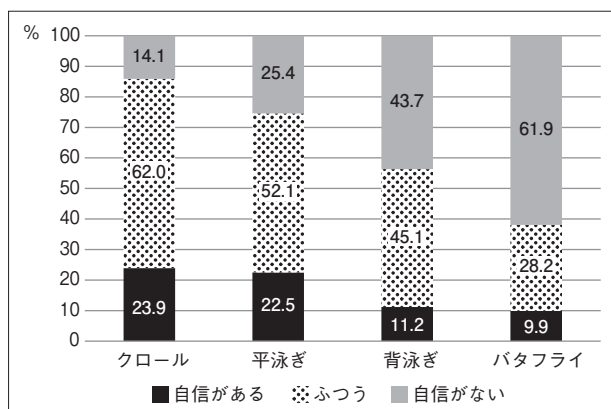


図4 各種泳法について (自己申告)

導の流れとして、こちらで毎回時案を作成し、事前に指導スタッフにメールで送り把握してもらった。授業当日は、13:00発の専用バスに受講者全員と専任教員2名が乗り、約20分かけて市民プールに到着する。更衣をすませて、授業を開始できるのが13:30分であった。最初に筆者が全体に向けて本時の内容説明と模範を示し、その後レベル別に3つの班にわかれ、それぞれ練習をすすめた。14:40分をめどに全ての班が練習を終えて集合したところで、指導スタッフからそれぞれ感想と助言を述べてもらい挨拶をして練習は終了となる。帰りは待機していた専用のバスに15:00までに集合させ、その後出発し、大学に到着次第授業は終了、順次解散とした。なお、授業中の安全確保のための監視体制および水質・水温・室温等の環境については、施設側に一任したが、特に問題はなかった。

2) 受講生の水泳経験と泳力

受講生の水泳経験について、学校体育における水泳の授業の有無(図1)から、小学校時は100%、

中学校時は93.0%、高校時は32.4%の者が「授業があった」と回答した。また、学校にプールが整備されていたかどうかについて、小学校時は97.2%、中学校時は88.7%、高校時は38.0%であった(図2)。受講前の泳力(自己申告)については「全く泳げない」と回答した者が1.4%、「25M泳ぐ自信がない」が9.9%、「25M~50M未満」が26.7%、「50M以上100M未満」が29.6%、「泳力には自信がある」が32.4%であった(図3)。泳法については「自信がある」と回答した種目は「クロール」23.9%、「平泳ぎ」22.5%、「背泳ぎ」11.2%、「バタフライ」9.9%の順で、逆に「自信がない」と回答した種目は「バタフライ」61.9%、「背泳ぎ」43.7%、「平泳ぎ」25.4%、「クロール」14.1%という結果であった(図4)。これまでに泳いだことのある場所について、屋内プールと回答した者は85.9%、屋外プールは94.4%、川が70.4%、海が67.6%であった(表4)。遠泳経験のある者は9.8%であった(表5)。飛び込みができるかどうかについて、「自信がある」と回答した者

表4 泳いだことのある場所 %

屋内プール	85.9
屋外プール	94.4
川	70.4
海	67.6

表5 遠泳経験 %

あり	9.8
無し	81.8
わからない	8.4

表6 飛び込みができるか %

自信がある	9.9
自信がない	33.8
わからない	56.3

表7 飛び込み台からの
飛び込み指導の有無 %

教わったことがある	26.8
ない	64.8
わからない	8.4

表8 水泳の指導経験 %

あり	1.4
無し	98.6

表9 水泳指導法に対する関心の有無 %

あり	19.7
無し	45.1
わからない	35.2

表10 水泳指導者資格への関心の有無 %

あり	16.9
無し	52.1
わからない	31.0

表11 全日程における学習評価 (Aクラス)

	楽しさ (学習意欲)	達成 (技能や認識)	学び方 (学習の規律)	かかわり (協力)	学習内容 自己評価
平均	8.2	11.1	11.6	7.8	7.9
最大値	8.6	11.5	11.9	8.4	9.8
最小値	7.7	10.6	11.3	6.9	6.2

表12 全日程における学習評価 (Bクラス)

	楽しさ (学習意欲)	達成 (技能や認識)	学び方 (学習の規律)	かかわり (協力)	学習内容 自己評価
平均	8.5	11.6	11.9	8.2	8.0
最大値	8.7	11.8	12.0	8.6	9.4
最小値	8.3	10.9	11.7	7.9	5.7

表13 本日の練習内容について12段階で評価するならどこにあてはまりますか？

1・2 楽	3・4 やや楽	5・6 普通	7・8 ややきつい	9・10 きつい	11・12 非常にきつい
----------	------------	-----------	--------------	-------------	-----------------

は9.9%、「自信がない」が33.8%、「わからない」が56.3%であった(表6)。実施に飛び込み台からの指導を受けとることがあるかどうかについては、教わったことがあると回答した者が26.8%、「ない・わからない」が73.2%であった(表7)。水泳指導経験の有無についてであると回答した者はわずか1.4%(表8)、水泳の指導法に関心があると回答した者は19.7%(表9)、さらに水泳指導者資格に関心のある者は16.9%と低い割合であった(表10)。

3. 受講生の学習評価について

学習評価については、木曜日午後Aクラスを表11に、金曜日の午後Bクラスを表12にそれぞれ示した。2クラスとも練習内容や進度は全く同じであった。学習評価の平均値が「学習意欲」がAクラス8.2、Bクラス8.5、「技能・認識」がAクラス11.1、Bクラス11.6、「学習の規律」がAクラス11.6、Bクラス11.9、「協力」がAクラス7.8、Bクラス8.2で、どの評価項目においても高い評価を示した。また、毎回の練習内容について10段階の自己採点をさせたところ(表13)、その平均値はAクラス7.9、Bクラス8.0で、全体として「ややきつい」という結果であった。

最終授業終了後の調査では、実技テストの課題で

ある「100M泳ぐことができたか」という質問に対して100.0%の者が「はい」と回答した(表14)。また、この課題設定が適切であるかという質問に対して、「適切である」と回答した者が87.3%、「どちらともいえない」と回答した者が12.7%であった(表15)。受講前より泳力はついたかという質問に対して、「ついた」と回答した者が95.8%、逆に「どちらともいえない」と回答した者が4.2%であった(表16)。また受講前より自信がついたかという質問に対して、「自信がついた」と回答した者が98.6%、「どちらともいえない」が1.4%であった(表17)。中学生や高校生に水泳指導ができるかどうかについては、「できる」と回答した者が26.8%、「どちらともいえない」および「いいえ」が73.2%であった(表18)。受講後自信のある泳法についての質問では、「クロール」が46.5%、次いで「平泳ぎ」が33.8%、「背泳ぎ」14.1%、最も低い割合であったのは「バタフライ」の5.6%であった(図5)。逆に最も自信のない泳法は「バタフライ」が60.6%、次に「背泳ぎ」22.5%、「平泳ぎ」12.7%、「クロール」4.2%の順であった(図6)。

また、授業内容において最も難しいと感じた項目について、割合の多かった順に「救助法」が64.8%、

表14 100M（課題）は泳ぐことができたか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	100.0	0.0	0.0

表15 評価設定は適切であったか %

項目	適切	不適切	どちらともいえない
	87.3	0	12.7

表16 受講前より泳力はついたか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	95.8	0	4.2

表17 受講前より自信はついたか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	98.6	0	1.4

表18 中学生や高校生に指導ができるか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	26.8	46.5	26.7

「立ち泳ぎ」が50.7%、「バタフライの脚の動作」が49.3%、「バタフライの腕の動作」「バタフライのコンビネーション」が47.9%、「各種ターン」が40.8%であった（図7）。

環境面については、プールまでのバス移動について「適切である」とした者が80.3%で、「どちらともいえない」は14.1%、「不適切である」と回答した者が5.6%であった（表19）。さらにプールの環境

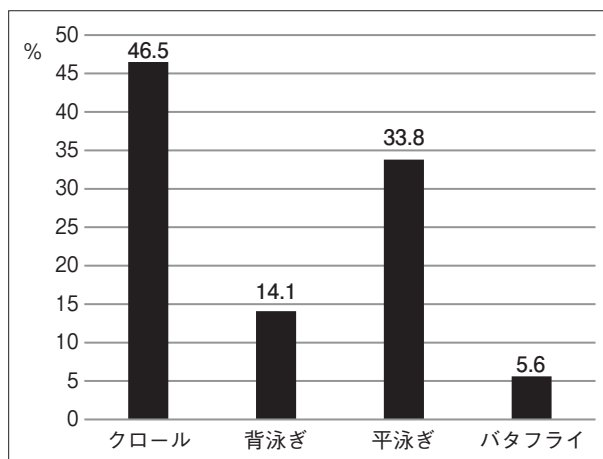


図5 受講後最も自信のある泳法は？

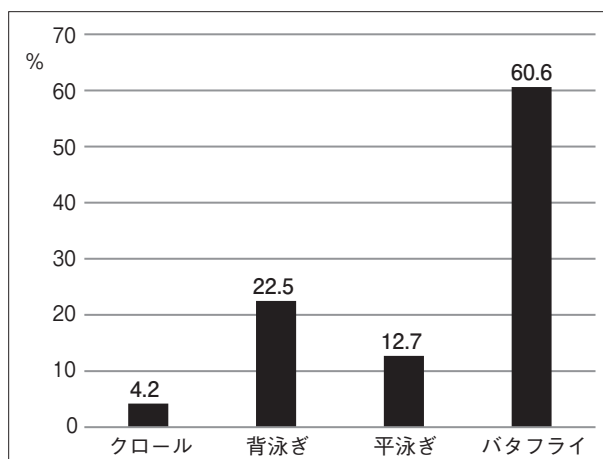


図6 受講後最も自信のない泳法は？

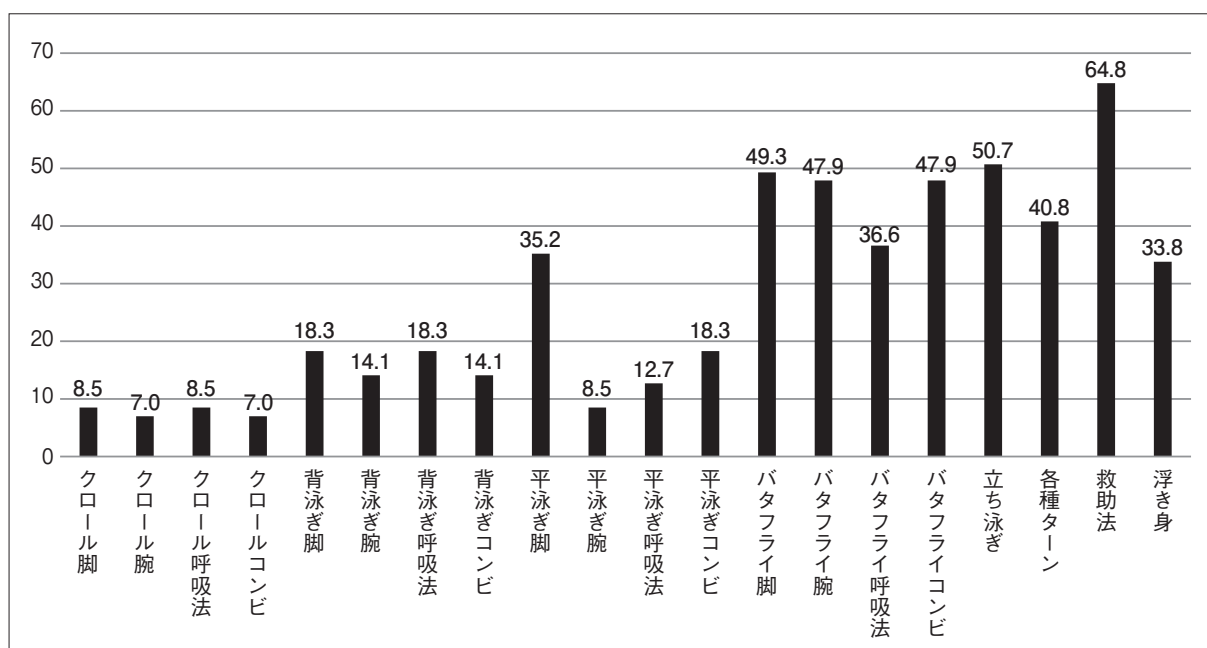


図7 授業内容において最も難しいと感じた項目はなにか（複数回答%）

(水深・水温・安全面等)についても「適切である」とした者は94.4%、「どちらともいえない」は4.2%、「不適切である」は1.4%であった(表20)。泳ぐ時間については「適切であった」が76.1%、「長い」とした者が15.5%、「短い」とした者も8.4%であった(表21)。そして指導スタッフについては「適切であった」とした者は97.2%、「適切でない」とした者は2.8%であった(表22)。

表19 プールまでのバス移動について%

項目	適切	不適切	どちらともいえない
	80.3	5.6	14.1

表20 プールの環境(水深、水温、安全面)について%

項目	適切	不適切	どちらともいえない
	94.4	1.4	4.2

表21 泳ぐ時間はどうか %

項目	適切	長い	短い
	76.1	15.5	8.4

表22 指導スタッフは適切であったか %

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
	97.2	2.8	0

考 察

1. 水泳受講者(2年生)の特徴について

学部が開設されてから2年目の本年度4月の時点では、2年生Aクラス42名(男子35名、女子7名)とBクラス41名(男子34名女子7名)、合計83名の学生が履修対象であった。「水泳」は本学のカリキュラム上、保健体育教員免許取得希望の有無に関係なく、卒業単位数のために全員が取得しなければならない科目になっている。しかし、今回の調査対象者数は、単位を取得できた者71名であり、12名が未修得という結果である。未修得になってしまった主な理由は、水泳実技の到達目標を達成することができなかった者、前期途中で退学した者、課外クラブの活動中にケガをしたり、あるいは交通事故にあって参加できなくなった者、その他、クラブ活動を優先し授業の出席回数が不足し失格になった者など色々である。調査対象者71名の水泳の初回授業の調査では、表23に示す通り、教員免許取得希望は中学校が全体の53.5%、高校が63.4%で5割~6割の学生が

表23 取得希望の免許及び資格について%

中学校保健体育教員免許	53.5
高校保健体育教員免許	63.4
スポーツインストラクター	46.5
スポーツクラブマネージャー	18.3
初級障害者スポーツ指導員	7.0
中級障害者スポーツ指導員	2.8
スポーツリーダー	2.1
レクリエーションインストラクター	5.6

教員免許の取得を希望していることになるが、それ以外の学生は卒業単位数を満たすためだけに受講することになる。免許取得を希望するか否かによっては、受講する学生の授業に取り組む姿勢や意欲も違うことが考えられ、教育内容の基準をどこに置くか難しい面があったが、極力免許取得希望の学生を対象とした内容を計画した。スポーツ系の学部在籍している学生であるため、もともとスポーツや運動をして身体を動かすことが好きであり、観るのも好きな者が多かった。また、大学入学以前の「体育」の科目が好きで、成績評価も良かった者の割合が高かったが、意外にも現在の自分自身の健康や体力には自信のない者も多かった。対人関係では、赤ちゃんや子どもに対しては、可愛いとっていて好きな者が多かった。また一緒に遊んであげることでもできるようであった。高齢者に対してもコミュニケーションをとれる割合が子どもに対する場合と同様の割合であった。しかし、初対面の人と接することに関しては、どちらかといえば戸惑っている者の割合の方が高かった。日頃の授業を通して彼らの様子を見てみると、同じクラブ活動に所属する仲間と行動することが圧倒的に多く、しかもこの学年については硬式野球部員が高い割合を占めており、彼らの行動そのものが良くも悪くも目立ってしまう。全体的には自ら積極的に他人に関わっていくことが苦手な者が多いように思われる。性格についての調査結果からは、明るいと自覚している者は約6割程度で、忍耐力があると思っている者も約半数であった。努力家であるかどうかは、約6割の者が否定的な回答をしており危惧するところである。さらに現在取り組んでいるスポーツ技術についてより向上させたいと思っている割合は高いにもかかわらず、それに関する本や視覚的教材を有効に活用している者の割合が低く、関心が薄いという結果を示した。課外活動に取り組んでいる学生たちの様子を見る限り、クラ

ブ活動の練習には各々重きを置いて熱心に練習に参加し、意欲的に自主トレーニングも実施しているようである。身体を動かすことは得意だが、理論的に頭で考えることをしようとするとなかなか苦手意識があるようで、どちらも大切であることを理解させなければならない。

2. 学生の指導経験と指導能力について

先に述べたように、初回ガイダンス時の調査結果では、受講生のうち教員免許取得希望者は5割～6割であった。運動やスポーツの指導経験のある者が7割、また機会があれば教えたいと思っている者の割合も高かったことから、指導意欲は期待できると思われた。しかし、最終授業時に実施した調査結果からは、運動やスポーツの指導者になりたいと思っている者は5割にも満たないし、学校の体育の先生になりたいという学生は3割にも満たない結果だった。まして水泳に関しては、中学生や高校生に指導できる学生は3割を切っており、受講の前後で全体的に指導意欲が減少してしまった結果となってしまった。一概に学生の考えている指導者というのは必ずしも学校の先生だけではないし、もう少し身近な存在、例えば自分の取り組んでいるスポーツのコーチや監督という場合もあるし、水泳に関して言えば、自分の泳力に自信はついたものの、なかなか指導するレベルまでは到達できなかったということが考えられる。いずれにしても、指導者、特に中学・高校の教員を目指す学生にはそれ相応の指導力を身につける必要があり、今後現場での行事や集団を引率する機会も多くあると思われるので、野外教育を含めた実践的な教育をしなければならないと思われる。

3. 水泳の授業で修得させる泳力について

今回の受講生の水泳経験については、小学校の体育の授業においてはすべて行われていたが、中学校では93%であったことから、義務教育においてはおおかた実施されていたと考えてよい。しかし、高校においては3割程度しか授業として展開されていなかったが、在籍していた学校にプールがあり、授業が展開できる環境にあったかどうかという影響も考えられる。水泳の実施には、陸上で行われる種目以上に安全面での配慮やプールの管理体制が求められるため、担当する体育教員もかなり神経を遣う。しかし、水の事故から自分の身を守るための術を獲得するためには、幼少期から水に親しみ、プールだけ

でなく海や山、川などの自然と向き合って自ずから体験をしていくことが必要になってくる。無論教育現場で事故を起こしてはならないが、安全面を優先するあまり飛び込み台を撤去し飛び込みを教えなくてよいとか、「遠泳」についてはたとえ実施できる協力体制が可能であっても、天候等に大きく左右される一大行事になるので、敬遠されがちになってしまうのは残念である。実際、今回の受講生の泳力は、事前調査においても「まったく泳げない」「25M泳ぐ自信がない」と回答したものが全体の1割いたことを考えると、大学生に至るまでの水泳教育に疑問を持たざるを得ない。また、50M以上泳ぐことができ、自信のある者は約6割だったが、このような学生に向けてはむしろ今以上に泳力を向上させ、教育現場において水泳の指導ができるようになることをねらいとしなければならないのであるが、時間数の制限や班の数、指導スタッフの数などの関係で限界がある。受講後の学生自身の授業評価結果から、半期の授業を終えて9割強の学生が、各々の泳力も向上し自信もついたと回答していたので内容の上では概ね高い評価が得られたと思われるが、指導する立場として必要な指導力については十分でなかったといえる。今回の水泳技術評価（実技テスト）の課題は、最低限の条件として「クロールともう1つの泳法で100M泳ぎきること」であった。泳法については25M単位で種目が多いほど評価は高くなると事前に伝えていた。したがって、4泳法で25Mずつ泳いで100M泳ぐことができれば技術面は最も評価が高いことになる。技術レベルで班分けをしたため、担当者としては一番技術が上の班は全員が4泳法で泳ぐことを想定していたが、確実なところを選択して最低条件のみでテストにのぞんだ学生もいれば、下の班であっても、少しでも評価が上がることを期待して挑戦的にのぞんだ学生もいた。受講者の全体の技術レベルを把握してから課題設定はしているが、学生の泳力向上に向けてのモチベーションをいかにあげていくかということも加味して授業をすすめていくことも大切である。

4. 本年度の水泳の授業における課題点について

1) 身体的理由でプールに入水できない受講生対応

今回、受講者の中に身体的な理由からプールに入水できない学生が2名いた。別の科目で補うことができれば問題はなかったのだが、現行のカリキュラ

ム上では前述したとおり、すべての学生が水泳の単位を取得しなければ卒業単位数が不足する事態をまねくことになってしまうため、急きょ対応を考えなければならなくなりました。本来、常識で考えても、水に入ることのできない者に水泳の単位認定をすることは到底できないし、これまで筆者はこのようなケースを経験したことがない。学科会議にあげて協議した結果、履修させないということではできないため、課題を与えるなど単位認定できる方向で、担当者が工夫するしかないという結論に至った。担当者としては腑に落ちないが、この2名の受講生に対して、①毎回の授業に出席すること②プール内外で見学をし、授業内容を記録し感想を記載すること③毎回の授業内容に沿って事前にテーマを与え、レポートを提出すること。これら3つの課題を課した。2名の取り組み姿勢にはかなりの差があったため、途中経過も学科会議において報告したが、最終的には2名に対し単位認定をした。今後もこのようなケースは考えられるため、対応策を考えたい。

2) 借用コース制限と一般営業中の実施について

市民プールにおいて借用できたのは25M×3コースだったため、技術のレベルも3段階にわけた。できるだけ均等になるよう試みたが1コース当たり12,3名であった。1コース単位で泳ぐ練習をするにはなかなか厳しく、最初にスタートする者は良いのだが、あとから続く者は先に到着した者がよほど配慮していかないと同じ距離を泳ぐことができない。学生からも不満の声が上がっていた。また、平日の午後という時間で、プール半面は常に一般の方々で練習をしている環境での実施だったため、一般客からの苦情が時々施設側にきていた。例えば男子更衣室での騒がしさ、ロッカーの使い方、トイレのスリッパのそろえ方などいわゆるマナーの悪さの指摘が多かった。その時々で注意や指導はしてきたつもりだが大変気を遣った。しかし常連客のなかには「毎回学生さんの元気な様子を見ると元気になれるし楽しい」と話す寛容な方もいた。いずれにしても、本来学内の施設での授業展開であれば気にならないことであっても、借用している側なので多くのことに神経を使ったことは事実である。

おわりに

スポーツ健康科学部が認可されスタートしたとはいえ、プール設備のない本学的环境条件の中で、半期間週2回学外へ移動して水泳の授業を実施しなければならないことは、担当者としてはかなりの責任を負う。過去に人間福祉学部の中の1つのコースで保健体育教員免許の取得希望者だけに対して実施していた頃とは比較にならないほどの労力である。受講人数が多い上、今回の調査結果からもわかるように決して教員免許の取得を希望する学生ばかりではない。そのためカリキュラム上の工夫が求められる。そのような中でもトラブルや事故が全くなく終わることができ安堵しているが、それには指導体制として専任担当教員をもう一人加えてもらえたことや、借用先のプールの管理者や指導スタッフの方々の協力体制、そして毎回の移動バスの運転手さんなど、多くの方々の支えがあつてのことである。改めて感謝の意を述べたい。来年度は学生の在籍人数もすでに本年度より15名ほど多いことに加え、今回の単位未修得の学生の対応を考えると、対策を考えなければならない。今回明らかになった課題点を踏まえて、よりよい方向に向かえるように努力はしていきたいと思う。

引用文献

- 全日本スキー連盟：楽しいスキー教室. スキージャーナル株式会社, 1996
- 水野かがみ「保健体育教員を目指す学生に必要な泳力と指導能力について～中部学院大学における5年間の授業展開から～」中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第16号. 2015, P119～126
- 文部科学省：中学校学習指導要領. P89-97, 2008
- 文部科学省：高等学校学習指導要領. P90-97, 2009